



旌善（チョンソン）大会にむけて

藤田

私たちの日韓合同授業研究会は、1995年第1回交流会を50年目の光復節でにぎわうソウルで行った。「近くて遠い」と言われ、歴史の中で多くの課題をもった国同士。その両国が、授業を通して出会う。そこから何か生まれることを願って、交流会は始まった。

あれから17年。たくさんの熱い議論を重ねてきた。

私たちの会は、個人の自由意思による参加によって成り立っている。当然、毎回同じメンバーで議論できるわけではない。だから議論は、毎回、少し戻りながら前に進む。しかも、通訳を通した話し合いは、倍の時間がかかる。ゆっくりと、ゆっくりと。時にもどかしく思えるほどであった。しかし、毎回の熱い語り合いの中で与えられた視点は、日常の子どもたちとの学びの中で、或いは、それぞれの営みの中で、じっくりと深められていく。このようにして、交流会は進められてきた。そして、その中で確実に私たちの友情は深められてきた。

クォン・デフンさんが、自分の職場のある地域の民話から、日本とのつながりを報告したことがある。日本の神話の象徴と言われる三本脚の八咫鳥（やたがらす）は、実は韓国の民話にも、中国の民話にも登場することを知った。「古事記」「日本書紀」という権力を正当化するためにつくられた歴史の中に、実は民衆による交流の歴史の断片が潜んでいることに、驚かされながら、歴史の見方を教えられた。

台湾から沖縄、北九州、韓国、北朝鮮へと旅をするクロツラヘラサギの観察をしたことがある。渡り鳥が軽々と国境を超える姿に感銘を覚えながら、生態を守るために、国境を超える取り組みが必要であることを学んだ。クロツラヘラサギの姿を思いながら、私たちは、韓国の教員と朝鮮学校の教員と共に肩を組み、歌をうたう場面に立ち会うことができた。

目次

1. 旌善（チョンソン）大会にむけて 1
2. 原発事故と子どもたち 2
3. 子どもたちと震災 6
4. 震災 生徒の安全確保 節電の影響 7
5. 震災を語る 8
6. 原発事故をどのように位置づけるか 13
7. 第17回 チョンソン交流会 実施要綱 14

そして、一昨年、沖縄で開かれた交流会で、「太平洋戦争が勃発するや韓国青年達は日本各地に強制的徴募により日本軍に従軍し、ここ沖縄にも1万人あまりが動員され、戦死あるいは虐殺により命を落とした……。」と書かれている朝鮮人慰霊塔における数字と、加害者被害者の区別なく名前を刻んでいるはずの摩文仁の丘に、約500名しか記名されていない朝鮮人戦争被害者数の違いを突き付けられた。名前すら残されていない朝鮮人被害者の存在を、聞き取り調査によって明らかにしようという取り組みが始まり、「未来への対話・メモリアル記念館」構想へと発展している。

昨年は、濟州島で、日本の侵略の後、南北が分断される中で起きた悲しい歴史の現場に立った。絶望的な現場の中で、言葉を失いながら、その歴史を掘り起こし、そこから希望を生み出そうとする人々に出会った。

大きな課題に向かい合うことの多かった最近の交流会を、一度ゆっくり振り返り、今後の方向を確認し合うような時間を持つことが必要なのではないかと考え、17回大会は埼玉での開催を考えていた。しかし、歴史は私たちに立ち止まることを許さなかった。3月11日に東日本大震災が起き、津波によりたくさんの方が亡くなった。震災と復興の過程で、多くの被害に合った子どもたちと同様に朝鮮学校の子どもたちのことを思う。

さらに原発の事故が起き、事故はまだまだ終焉の兆しも見えずにいる。この中で、原発は私たちの生活に直接の影響を与え、その奥にある政治の闇が姿を見せている。「フクシマ」は世界の言葉となり、世界を揺さぶっている。日本でも韓国でも、今後原発をどうするのが問われている。北朝鮮においても、核開発の問題が大きなテーマである。また、震災に対する韓国の人たちの温かい励ましに励まされながら、今までにない両国の関係が生まれているようにも思われる。

17回大会は旌善（チョンソン）大会となった。江原道の豊かな自然の中にあるチョンソンは、炭鉱の町であり、アリランの故郷として知られる。フィールドワークはアリラン研究所のチンヨンソン所長を中心に案内をお願いした。古い民謡の中に刻まれた民衆の想いを感じながら、東日本の地震・津波・原発から見えてきた東アジアの未来を語り合いたい。きっと熱い語り合いが生まれるはずだ。多くの参加を期待する。

原発事故と子どもたち

大森

4月末に仙台の東北朝鮮初中高級学校を訪ねたときに尹鐘哲（ユンジョンチョル）学校長から聞いた一言が頭を離れません。「わたしたちより福島の子どものほうが大変なんだ」。この言葉を手がかりにして、私はずっと気になっていたことを正面から考えるようになりました。どうしたら、原発事故で放出されている放射性物質の危険から子どもを守ることができるのか。

地表に堆積した放射性物質が発する放射線は外部被曝をもたらす。食物等から体の中に入った放射性物質が発する放射線は内部被曝をもたらします。細胞の放射線感受性は細胞分裂が盛んな細胞ほど高いため、子どもへの影響は甚大です。しかし、立法と行政の対応は遅れており、個々の学校と家庭に、混乱と無理が強いられています。

この間の行政の対応には、①避難指示②屋内退避指示(緊急時避難準備区域の設定を含む)③被曝線量限度の緩和④校庭の空間線量の低減がありました。ここでは①③④を概観します。

避難指示

3月11日の地震発生から6時間後の20時50分、まず福島県が、福島第一原発の半径2キロ内の住民に避難指示を出しました。21時23分、次に政府が、避難指示を3キロ内に拡大。これらは2000年6月に施行された原子力災害対策特別措置法（原災法）による措置です。

12日5時45分、政府は避難指示を10キロ内に拡大。15時36分、同原発一号機で爆発が発生して大量の放射性物質の飛散が始まると、18時25分、政府は避難指示を20キロ内に拡大しました。

周辺地では、大人も子どもも、避難を繰り返さなければなりません。10キロ内の波江町立波江小学校にいた高野啓太君（当時4年生）の場合、波江町北西の自宅に避難した後、12日朝に近隣の波江町立津島中学校（30キロ内）に避難し、午後の爆発を受けてその後も避難を繰り返し、3月13日に福島市飯坂町の避難所にたどりつきました（朝日新聞5月16日）。

その後、原災法に基づく避難指示には強制力がないため、20キロ内に入出入りする住民が増えました。4月22日、政府は、20キロ内の10市町村のうち圏内に世帯がない広野町を除く9市町村を対象にして、警察による道路封鎖などの強制力をもった警戒区域を設定しました（災害対策基本法による）。

被曝線量限度の緩和

同日には政府による計画的避難区域の設定も行われました（原災法による）。指定された地域の住民を約1ヶ月かけて別の場所に避難させる措置です。第一原発から半径20キロ内にあり、震災発生から1年間の被曝線量が20ミリシーベルトを超えそうな福島県の5市町村にまたがる地域です（図1参照）。

この基準値の設定には重大な意味がありました。1年間20ミリシーベルトを超えそうなきは避難指示を出すけれど、20ミリシーベルトを超えなければ避難指示を出さない。そうした政府の認識が明確にされました。

国内の法規（文部科学省「放射線を放出する同位元素の数量等を定める件」）が定めている平時における公衆の被曝線量限度は1年間1ミリシーベルトです。20ミリシーベルトはその20倍の値であり、ICRP（国際放射線防護委員会）が定めている原発労働者の被曝線量限度の値と同一です。公衆の被曝線量限度は、一気に緩和されました。

子どもにも同じ基準

いま文科省は、子どもにも右と同じ被曝線量限度を適用しつつあります。その起点が、文科省4局長が4月19日に福島県教委にあてた「福島県内の学校等の校舎・校庭等の利用判断に



郡山市立芳山小学校の表土除去
(撮影：大森直樹 2011年5月26日)

おける暫定的考え方について」(通知)でした。

この通知は、学校の校舎・校庭などの利用判断における「暫定的な目安」として、毎年 20 ミリシーベルトを上限に設定し、校庭(屋外)で許容される空間線量率を毎時 3・8 マイクロシーベルト(保・幼・小は高さ 50 センチ、中は高さ 1 メートルの値、1000 マイクロシーベルトが 1 ミリシーベルト)と算出するものでした(年換算で 33 ミリシーベルトになるが、屋内活動分を 6 割に見積もって年 20 ミリシーベルト)。

この「不当に高い」(山内知也神戸大学大学院教授)数値を超えてしまう学校が、福島県内には福島・郡山・伊達の 3 市に 13 校ありました(学校が閉鎖される警戒区域・計画的避難区域・緊急時避難準備区域は除外)。しかし、政府は、福島県教委と各市教委を通じて各学校に「生活上の留意事項」を示すだけで、有効な対策を講じませんでした。13 校では、長袖にマスクを着用した子どもたちが登校を続けています。

郡山(1)

そのなかの 1 校が郡山市立薫小学校でした。4 月 27 日、郡山市は、市独自の対策として、同小学校に重機を入れて校庭の表土を除去しました。同市の発表によると、除去前の地表 1 センチの測定値「4・1」が、除去後には「1・9」(単位は毎時マイクロシーベルト、以下同)です。

このとき郡山市では、「より安全面に考慮し」(「郡山市薫小学校・鶴見担保保育所の表土除去レポート」4 月 27 日)、小・中では高さ 1 センチで「3・8」以上、保育所では高さ 1 センチで「3・0」以上を作業の対象としました。このため薫小を含めた対象校は小中 15 校、保育所 13 園に及びました(作業は 4 月 27 日～5 月 4 日)。

28 校園から除去した汚染土は、近郊の処理場に置く予定でしたが近隣住民の反対に直面します。行き場のなくなった汚染土は、各校園のすみに積み置かれることになりました。

5 月 1 日、郡山市長は、福島・二本松・伊達・本宮・大玉の 5 市長と連名で、文科大臣に要望書を届けました。その第 1 項は、除去した土の処理方法と処理場所の基準を政府が示すこと、除去と処分の費用を政府が支援することを求める内容でした。



郡山市安積保育所で積み置かれた汚染土

(撮影：大森 2011 年 5 月 26 日)

校庭の空間線量の低減

政府は、市長たちのささやかな要望にも正面から応じることはありませんでした。5 月 11 日、文科省 1 部 4 局が福島県教委にあてた「現地調査を踏まえた学校等の校庭・園庭における空間線量低減策について」(事務連絡)は、日本原子力研究開発機構が福島大学の協力を得ておこなった現地調査の結果として、地表の汚染土を「まとめて地下に集中的に置く方法」と「上下置換法」を「有効である」として示しました。予算措置の言及はありません。

この報せを受けて、県内の小学校教員は「親は納得しないだろう」とつぶやきました。県内の親は「汚染土を埋めた校庭で子どもを遊ばせる神経が理解できない」と怒りを押し殺していました。

文科省前

5月23日、文科省前では、「子ども20シーベルトを撤回せよ！福島の子どもたちを守れ！」という、「文部科学省包囲・要請行動」が行われました。福島から上京した親たちをはじめ、全国から650人が参加して文科省前を埋め尽くし、その模様がテレビ各局と新聞各紙により全国に報じられました。

郡山（2）

翌24日から、郡山市では、「さらなる教育環境等の向上のため」（市「小・中学校、保育所の校庭等における表土除去に関するお知らせ」5月20日）、保・小では高さ1センチで「1・5」以上、中では高さ1センチで「2・0」以上を対象として、新たに小19校、中1校、保育所8園で表土の除去作業を行いました（28日まで）。

25日の朝刊で私はこのことを知り、翌26日に郡山市の除去作業の現場数校を訪ねました。各校の先生が一様に話してくれたのは次のことです。「子どもたちは、もう2ヵ月半も外で遊んでいません。子どもも親もストレスがたまって限界に近づいています。1日も早く戸外で思い切りあそばせてあげたい」。

玉虫色

翌27日、高木文科大臣と鈴木副大臣による記者会見が行われ、文科省の文書「福島県内における児童生徒等が学校等において受ける線量低減に向けた当面の対応について」が示されました。そこには次の文言がありました。

「・・・年間1ミリシーベルトから20ミリシーベルトを目安とし・・・今年度、学校において児童生徒等が受ける線量について、当面、年間1ミリシーベルト以下を目指す」

「年間1ミリシーベルトから20ミリシーベルト」の「目安」（すなわちその最大値の年間20ミリシーベルト）が被曝線量限度なのか、「年間1ミリシーベルト」の目標値が被曝線量限度なのか曖昧です。ICRPや国が設定を重ねてきた被曝線量限度は、その概念自体に「被曝は一定値以下なら安全」という思い込みを生じさせる問題性がありますが、その数値すら曖昧にして、子どもたちの被曝量の増大を放置することは許されません。

子どもたちは

同日の『朝日新聞』声欄には、福島の定時制高校教員中村晋さんの投書が掲載されていました。中村さんは、福島の子どもたちの怒りと不安を書きとめています。

「・・・4年の男子生徒が怒ったようにこう言った。「いっそのこと原発なんて全部爆発しちゃえばいいんだ！」内心ぎょっとしつつ、理由を聞いた。彼いわく「だってさあ、先生、福島市ってこんなに放射能が高いのに避難区域にならないっていうの、おかしいべした（でしょう）。これって、福島とか郡山を避難区域にしたら、新幹線を止めなくちゃなんねえ、

高速を止めなくちゃなんねえって、要するに経済が回らなくなるから避難させねえってことだべ。つまり、俺たちは経済活動の犠牲になって見殺しにされるってことだべしだ。俺はこんな中途半端な状態は我慢できねえ。だったらもう一回ドカンとなっちゃった方がすっきりする」とのことだった。・・こういう声に一教師として応える言葉がない。ぐっとこらえながら耳を澄まし、高校生にこんな絶望感を与えている政府に対する怒りを覚えるばかりだ。」

子どもたちの声と保護者や教員の思いを政策に反映させて具体化することが急務です。福島県郡山市にある福島朝鮮初中級学校では、教職員と保護者が議論を重ねてきました。子どもたちの安心と安全のため、5月の半ばから県外の新潟朝鮮初中級学校で一緒に授業を受ける試みに着手したところです。いま福島では、子どもたちを放射線から守るための取り組みが、困難と苦労の中で始まっています。

子どもたちと震災

藤田

3月11日 その時、私は4年生と体育の授業中でした。大きく揺れを感じ、校庭の中央に集まり、しゃがむように指示しました。フライングカーペットのように地面が揺れ、電信柱や大きな木が、激しく揺れていました。揺れが収まってから、集団下校で下校することになり、再び校庭に集合した時、もう一度大きな揺れがありました。

その後、学期末まで地区班による集団下校が続き、また、放射能を恐れて校庭の遊びを取りやめました。牛乳が出回らなかったのも、給食のために水筒を持参することになりました。となりの目黒区では給食も取りやめたと聞いています。

数名の子が放射能から逃れるために避難しました。特に外国籍の子や、海外資本の会社に勤めている親たちの子が、避難することが多かったようです。

4月からは、通常に近づきましたが、節電の影響で廊下など電気を落としています。夏は子どものいる時間は冷房をつけてもよいことになりましたが28度厳守です。子どもが帰った後は、職員室以外は冷房を使わないということですが、この職員室の冷房の効きが悪く、汗をかきながら仕事をしているような状態です。

子どもたちには、折に触れ、東日本大震災の話や原発の話はしていますが、今年は3年生の担任なので、あまり込み入った話はしていません。しかし、すぐ隣が図書室で、委員会の子たちが東北大震災のコーナーをつくっているのを3年生もよく眺めています。避難訓練の時に、小学校の子どもたちがどのように逃げたのか話をしたら、子どもたちから親戚の話や帰宅難民になったお父さんの話などがたくさん出てきたので、作文に書いてもらいましたが、「思い出すのがこわい」と言う子がいたので、無理には書かせませんでした。その中でも勢いよくたくさん書いた子の文章を紹介します。

東日本大しんさい

3年男子

3月11日、今では3か月前、今も人が苦しんでいる。家とかが海に近い人は特に大変。大きなつなみが来て、ほとんどの人の命が消えた。テレビで見たときはすごくこわかった。家はあいていない。なぜかというとお母さんは仕事で遠くに行っていたからだ。かぎはいちおう持っていた。でも5年生の子の家へ行っていた。テレビは全部じしんのこと、つなみのことや、

石油コンビナートの大火事だった。家に帰ってみた。二階の砂時計がわれていた。ほかにもやきねんどやたんすがななめになっていた。そして5年生の子の家で夕ごはんを食べ、お母さんの帰りをずっとまっていた。8時半ごろやと帰ってきた。ぼくは、お母さんにだきついて話した。「砂時計がわれて、やきねんどもわれた。」と言いました。お母さんはびっくりした。家に帰ってそうじをした。そして、お兄ちゃんのがのどがかわいて、しょっきだなをあけたとたん、「ガチャーン」と大きな音がした。見てみると、ガラスのコップがわれていた。そこもすぐにお母さんがそうじをした。ぼくはまた、テレビを見た。きんきゅうじしんそくほうとかがいっぱいあった。また、ぞくぞくした。早くねようと思った。そして、おふろに入った。これまでをおふろの中でふりかえってみると、すごくすごくこわかった。でもこらえて、「チャポン。」と、おふろにもぐった。できるかぎりいきをとめて、「ぷはあー。」と、いきをはいた。そして、あがってパジャマにきがえてねむろうとした。でも、すごくこわかった。ねている時にじしんがおきたらどうしようとふあんになった。でも楽しいことを考えて、ニコッとわらってねむった。東日本大しんさい、とてもとてもこわかった。

震災 生徒の安全確保 節電の影響

金

3月11日13時40分ごろ。昼休みが終わって5校時の授業が始まって10分ほど過ぎた時間。この時間は、学級花壇にジャガイモを植えるための準備として、畑掘りの作業をしていました。毎週行っている調理実習の材料を作るためでもあります。この日のこの時間は、東京の学校とは思えないほど、非常にのんびりとした午後のひとときでした。「なんか今日はのんびりしてていいねえ」と誰もがそうっていました。

それから1時間後、全校生徒ともに卒業式の練習を体育館でしていました。体育館のきしむ音とともに激しい揺れが起きました。卒業式の練習中でしたので、全員にいすで頭を保護するように指示し、揺れが収まるのを待っていました。あまりの揺れの激しさに、泣きだす生徒が一人二人ではありませんでした。

・今までと違う

その後、生徒たちを集団下校させ、加えて全教員で各家庭へ連絡網を使って電話で安否確認を行いました。しかし、今回の震災ではその電話が使えなくなってしまいました。何度電話をかけても「災害が発生したため電話がかかりません」というアナウンスだけが流れていました。同じくメールも使えなくなりました。それでも、電話で確認をしなければならなかったのです。

結局この日、私の学校で最後に連絡がついた生徒は、全生徒が下校して6時間後だったといえます。毎月のように避難訓練を行っているため、その通りに行ったにも関わらず、今までと違うことばかりが起きてしまいました。

地震発生の次の週からは、3月中旬の出来事であったため、3学期の修了式まですべて午前授業となり、福島第一原発の事故から、学校のある東久留米市が計画停電地域に入ってしまった関係上、給食センターの使用が困難になったことから給食が中止となってしまいました。部活動も活動縮小か中止となりました。

・新学期をむかえて

3月11日の経験から、生徒たちを下校させてからの安否確認の方法について学校で議論を重ねました。電話やメールの使用がほとんどできなくなった中で、どのように生徒たちの安否確

Pa

認を学校でするのかについて、私の学校だけではなく、日本全国の学校で大きな課題になっていると思います。まして、30 数名いる生徒宅を担当一人が歩きまわって安否確認するのは、あまりにも現実的な話ではありません。

そこで私の学校では、地区班別で集団下校を行い、地区班でそれぞれ解散場所を設定しました。大きな災害が発生した場合、その解散場所まで教員が引率し、解散場所まで迎えに来られる保護者には、そこまで来てもらう方法をこれから行おうとしています。そして、電話が使える場合、地区班のリーダーが取りまとめて学校に無事を知らせるという方法を行おうとしています。

また、私が現在所属している特別支援学級では、生徒が学区域外から通学していること、障がいを抱えている生徒がいるため、担任と介助員とが生徒を一人ひとり自宅まで送っていく方法を考えています。

今回の震災を受けて、自治体から各学校へ具体的な安否確認の指針は出ていません。そのため、現段階では各学校が自力で方法を考え出しているのが現状です。

・節電の夏をどう乗り切るか

福島第一原発の事故を受けて、東京電力管内で節電が実施されています。学校では、ここ数年行っている CO2 削減運動の取り組みなどを行っています。環境に対する考えを深め、今回のことからではなく、節電の大切さを考えさせています。ただ、一番心配なのは、昨年同様の暑さです。昨年の暑さから、本来、今年度教室にエアコンが導入される予定でしたが、節電のためすべて中止となってしまいました。私の学校には、学級の教室にはエアコンがありません。各教室の扇風機 2 台だけです。ちなみに、数キロ先は練馬区ですが、教室にはエアコンが入っています。同じ東京都でも、23 区と市部（多摩地区）とでは、自治体規模の影響からか、施設設備にも大きな違いが出ています。

あまりの暑さで、生徒たちの学習効率も下がっているのが現状です。とりわけ、私の特別支援学級では、疲れが出やすくなっています。様々な暑さ対策をしていますが、扇風機だけでここまでやっていけるのかが心配です。

震災を語る

安藤

3月11日の東日本大震災から3ヶ月が過ぎた。未だに復興の兆しは見えない。「頑張ろう××」というスローガンも空虚に聞こえてくる。

毎日職場への通勤途上、デコボコや段差だらけの国道を通る。かつて片側2車線で中央に広い分離帯が続き、両側にも広い歩道を備えたその道は、今や中央に向かって競輪場のバンクのように大きく傾き歩道にも大きな傾斜が生じて舗装は壊れ、雨が降れば大きな池になり、通行することが困難な状態である。また周りを見渡せば電柱や周りの人家も大きく傾いている。液化化の影響だ。我が家もそうだが地盤が傾き、周辺の民家も庭の中央に大きな亀裂が生じて傾き、十数世帯が入居していたアパートも、もぬけの殻の状態である。大津波が襲った三陸地方ほどではないが、ここも確かに被災地である。

あの時私は東京に来ていた。卒業式を終え、ほっと一息ついたなかで、久しぶり人と会う約束をしていたためだ。

午後2時51分ころだと思う。地下を走る電車に乗車していた私は、新日本橋駅（総武快速線）に到着して減速はじめた車両が大きな衝撃を受けたのを感じ、はじめは鉄道事故かと思っ

た。車両はホームに完全に到着しているがドアは開かない。車内アナウンスは大きな地震が発生した模様とだけ何度も伝えている。近くの乗客がワンセグで情報を収集し始めた。千葉で震度6弱、しかも震源地が宮城県沖、この話しを聞いて終末が来たと思った。津波が発生し、東京湾にも入ってくると言う。駅について30分程たったころか、駅の外(地上)に避難してくれとのアナウンスで私たちは階段を使って地上へ上がった。想像していたより建物の被害はなかったが、サラリーマンが大勢道路や空き地にでていた。白いヘルメットを被っている人も多い。一刻も早く帰ろう。私は電車の運転再開を待ちに上野まで歩いた。しかし私が車を置いてきた成田にかえるために利用したいJRも京成もストップしたまま。結局両方とも今日1日運転休止した。私はいわゆる帰宅難民になった。

時刻はいつのまにか午後6時、意を決して歩けるところまで歩くことにした。そのころには、同じように徒歩帰宅する人々が幹線道路の歩道は溢れかえっている。京葉道路や千葉街道も車で溢れ、都営バスと徒歩の速度がそんなに変わらない状況だった。午後10過ぎ、途中休みながらやっと江戸川をわたって市川市へ、ここからまた1時間以上歩いて船橋市中山の千葉街道沿いの市営施設までたどり着いた。ここは徒歩帰宅の人のために施設を開放し、しかも仮眠もできるというので、とうとうここで一夜を過ごすことにした。食料や毛布の配給も受け、避難所生活を一瞬体験したようなものだった。

翌朝始発電車にあわせてこの施設を出発したが、未だに電車は不通のまま、結局ラジオの情報をもとに津田沼まで歩き、午前8時前に動き出した総武線にのって、どうにか成田まで帰ることができた。昼過ぎに神栖の家に到着し、20時間以上かけて帰宅した。

震災後、日韓合同授業研究会の皆さんから、安否を含むたくさんの方の励ましの言葉、そして韓国の韓日合同教育研究会の、先生方からの励ましの言葉を頂き、本当に涙の出る思いであった。そして1ヶ月たった4月下旬、突然東京に住む大学時代の友人から、「天然水」が届けられていた。彼によると、ついこの間私の住む地域の液状化の様子と断水がまだ続いていることを知って急遽送ってくれたのだという。彼の好意に感謝しながらも、私たちの地域は被災地なのか(であるけれども)、そうでないのか、改めて考えてしまった。

私の学校の生徒はこの震災後、どのような状況におかれているのか。信じられないかもしれないが、未だ本格的な調査はなされていない。そこでサンプル数は非常に少ないが、現在私が担当している1学年のあるクラスで、後記のようなアンケート調査を行った。

比較的人的被害が少なかった鹿島周辺だが、調査からは概述のように液状化や津波の被害を受けた者、家庭が経済的にダメージをうけ経済的に厳しい状況におかれている者もいる。原発事故については、福島第一原発から、200Km離れているという遠さ(近さというべきかも知れない)からか、大きな不安を感じている者の数は少ないようにも思える。

三陸を襲った巨大津波の影響と違い、ここでは震災で大きな被害を受けた家庭とそうでない家庭がマダラ模様で存在することも、この調査から浮かび上がってくる。これも被災を見えにくくしているのかも知れない。さらには、この地に住む外国人の状況についても、ほとんど伝わってこない。今後、こうした見えない・見えにくい被災とその影響をみつめていこうと思う。

15年前の阪神大震災の時、神戸が壊滅的な被害を受けているのに、30Kmほどしか離れていない大阪が大きな被害がなく、変わらない日常を送っているのを見て、神戸の被災地のひとの心境は複雑ではないかと思った。今回被災地からみて、震災による大きな被害のなかった東京や西日本の様子から、不思議だが「ほっと」している。どうしてこう思うのかは自分でもよくわからないが、日常生活を送れるところは、今まで通りおくってもらった方が幸せな事なのか

も知れない。ただ原発事故にともなって「強制的」に故郷を離れざるを得なくなった人々（私は「原発難民」と呼んでいいと思う。）に対するいわれなき「差別」が起こっていることもしっかり考えなければならないだろう。

※次項に、安藤さんの学校で行った生徒へのアンケート調査と結果を掲載します。

東日本大震災に関するアンケート調査

1年（ ）組 （ 男 女 ）

※なお各質問ともその他を選択した場合には、具体的にその理由をかきなさい

A 震災による影響で、みなさんの家庭で被害にあった項目があったら、回答欄に、
記号を書いて下さい。(複数回答可)

- ①津波によって住居が浸水し、避難した。
- ②保護者の勤め先（事業所）が地震・津波の被害をうけ、仕事に支障がでた。
- ③地震・津波の影響で保護者が失職に追い込まれた。
- ④液状化によって住居（アパートも含む）が傾き、居住不能になりやむなく引っ越した。
- ⑤住居の一部が壊れ、修理が必要になった。（居住は可能）
（屋根瓦が落ちた、ブロック塀が倒れたなどの破損も含む。）
- ⑥⑤のような被害もなく、以前通りに暮らしている。
- ⑦その他（ ）

A 回答欄

B 震災時に 一時的に自宅以外の場所に避難した人がいたら、次の中からえらんで、記号を書いて下さい。(なければ無回答)

- ①学校などの公共施設 ②近隣の知人宅 ③他県の知人宅等
- ④その他（ ）

B 回答欄

C 現在、次の中で何か気がかりなことがあったら、次の中から選んで、記号を書いて下さい。(複数回答可)

- ①原発事故の放射能の広がり、身体にどのような影響が起こるかが不安だ。
- ②被災したため家計が苦しくなり、今後思った通りの進路に進めるかどうか不安だ。
- ③いつまた大きな地震がおこるか不安である。
- ④特に大きな気がかりなことはない。
- ⑤ ()

C 回答欄

D 震災後に変わったことがあったら、次のうちから選び、記号で書いて下さい。
(複数回答可)

- ①ニュースや新聞などで、震災や原発事故の様子を細かくチェックするようになった。
- ②振動に敏感に反応し、夜寝ていても少しの揺れですぐおきてしまう。
- ③今まで持病であったものが、震災後ひどくなった気がする。
- ④被災による自宅の経済的理由から、希望進路を変更することにした
- ⑤特に変わったことはない。
- ⑥その他
()

D 回答欄

ご協力ありがとうございました。

東日本大震災に関するアンケート調査結果

(集計人数)

41名

A

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
男子	1	5	0	0	8	9	3
女子	0	7	1	0	11	6	2
合計	1	12	1	0	19	15	5

7理由 ・ガス・水道の不通 外壁や室内の損傷 車の流出 津波被害

B

	①	②	③	④
男子	4	2	2	2
女子	5	0	0	1
合計	9	2	2	3

4理由 ・庭先 友人宅 路上

C

	①	②	③	④	⑤
男子	4	1	9	11	0
女子	7	1	12	3	0
合計	11	2	21	14	0

5理由

D

	①	②	③	④	⑤	⑥
男子	6	3	0	1	15	0
女子	4	6	0	1	6	0
合計	10	9	0	2	21	0

原発事故をどのように位置づけるか

遠藤

1988年8月に中国延辺朝鮮族自治州からの帰途、北京、成田とだんだんと照明が明るくなるのを感じ、そして東京のコンビニに煌々と点いている蛍光灯にあらためて驚いた経験がある。照明だけではない。延辺の常温のビールに対し、北京のホテルや日本の冷えたビールは味のない冷たい水程度にしか感じなかったことも思い出した。ついでに記すと延辺では何度も断水を経験した。

便利な生活を味わうとやめられなくなる。それどころか薬物のごとくエスカレートする。しかもその「便利さ」は、たとえば首都圏JR電車を動かす電気が信濃川で作られ、東京の飲料水は利根川に大きく頼っていること等、自分たちのそばで作りに出したのではなく、遠くで作られ、そのおかげで享受できていることに気づかない。

福島原発の事故も、電気の一部分を東京からはるか離れたところに作られた原発に頼っていることを見せつけた。

そもそもなぜコンビニ、デパートや電車内はあんなにも明るく、冷房をきかせなければいけないのか。このような疑問すら、今回の事故が起きる前までは語られなかった。

それどころか、政府も電力会社もこの原子力発電所こそいかなる大地震にも耐えられ、どこよりも安全で、事故が起きることはありえないと言ってきた。火力発電所のように大気中に二酸化炭素も排出せず、水力発電所のように国土を破壊しない、環境にやさしい施設であるとも言ってきた。

学校教科書にも、原発を批判する記述は登場しなかった。今使用している日本史A教科書には、わずかにチェルノブイリ事故と巻原発建設をめぐる住民投票についての記述が、原発についての文脈ではなく、さっと一言ふれられているにすぎない。

しかし3.11の東日本大震災、原発事故に関する記述は、来年以降使用する教科書には載せよう。いや載らなければならない。日本史にも、きちんと位置づけなければならない。

ここで原発事故に関する生徒たちの文を紹介しておきたい。

- ・私達も発電所に頼りすぎて、あたりまえからかけはなれて、便利な方へばかり考えていた社会だったので、今考えなおす大きなきっかけだと思いました。なので発電所を批判する前に自分とも向き合わなければいけないし、批判する前に今後を早く考えた方がいいと思うし、政治はあまり意味がない、使えない組織だと思いました。
- ・1986年に起きたチェルノブイリ原子力発電所の事故で、日本もこういう事故が起こるかもしれないって分かっていると思うのに、原子力発電所を作るのを考えたのかなって疑問に思いました。それに日本は唯一の被爆国だから多少の事は分かっているほしい。日本では様々な事件とか大地震が起きていてこの福島第一原子力発電所事故もその一つだから、これから絶対にある事はないから、少しでも事故が起こった時の事を考えてほしい。

生徒たちはそれぞれ今回の大事件に向き合い、日常生活をきりくちに、決して他人ごとではなく、考え、行動しました。このことを私はいま、たのもしく思っている。

2011年 日韓合同授業研究会
第17回 チョンソン交流会 実施要綱

テーマ 東日本大震災とこどもたち

～震災、津波・原発事故から見えてきた日本・韓国・東アジア～
この震災の中で見えてきたこと、課題を、日韓の交流の視点に立って考えるとともにお互いの文化を理解し、授業創造に取り組む。

- 1 場所 韓国 江原道 チョンソンとその周辺
- 2 宿泊場所 ハイウォンホテル
住所:江原道 旌善(チョンソン)郡 舎北(サブク)邑 舎北(サブク)里 424
- 3 日程と内容
2011年8月5日(金)～8日(月)
- 8月5日(金)
13:00 バスにてソウルからチョンソンのハイウォンホテルへ
集合場所: 地下鉄5号線 光化門駅下車 3番出口
教保生命ビル前 (時間厳守)
13時以前に乗車場所に到着された場合、隣にある「KTオルレ プラザ」
で休息を取ることができます。
- 18:00～21:00 開会式と夕食 (セミナー室(ダイヤモンド))
両国代表挨拶。
チョンソンアリラン研究所長チンヨンソン氏を紹介。
自己紹介
- 8月6日(土)
7:00～ 朝食 (食堂)
9:00～12:00 授業報告: シンヒョンジュ
講演: チンヨンソン「チョンソンアリランについて」
(セミナー室(パール))
- 12:00～13:00 昼食 (食堂)
13:00～ チョンソン見学バスツアー
○石炭遺物保存館 (注1)
○居七賢公園 (注2)
○チョンソンアリラン研究所、
チョンソンアリラン学校見学、チョンソンアリラン公演鑑賞 (注3)
- 18:00～20:00 夕食 (食堂)

20:30～ 国別ミーティング 〈オンドル部屋〉

8月7日(日)

7:00～ 朝食 〈食堂〉

9:00～12:00 授業報告：善元幸夫

授業報告：ウジヨン 〈セミナー室(パール)〉

12:00～13:00 昼食 〈食堂〉

13:00～17:00 研究協議「震災・津波・原発事故から見えてきた日本・韓国・東アジア」
発表 カンジェスク：「平和運動と原爆被害者問題」

〈セミナー室(パール)〉

18:00～

レセプション

〈セミナー室(ダイヤモンド)〉

8月8日(月)

7:00～ 朝食 〈食堂〉

9:00～11:30 研究協議 交流会まとめ 来年度に向けて 〈セミナー室(パール)〉

11:30～12:30 昼食 〈食堂〉

12:30 解散 ハイウォンホテル→ソウル バスにてソウルへ移動

4 参加費

参加費 250,000 ウォン + 年会費 3,000 円

現地でいただきます。(参加費はウォン、会費は円でお願ひします。)

交流会に参加される方は、年会費もよろしくお願ひいたします。

※ 貸切バスの集合場所(教保生命ビル前)までの交通費は、自己負担でお願ひします。

5 参加申し込み・問い合わせ先

日韓合同授業研究会 E-mail ephphath@me.point.ne.jp

※申し込み締め切り：2011年7月17日(日)(第1次締切)

(注1) 旧 東原炭座(株)舎北鋼業所。1980年4月21日～24日にかけて舎北事態といわれる大規模な労使紛争が発生した。現在、舎北鋼業所は廃鉱となり、石炭遺物保存会が観覧案内を行っている。

(注2) 高麗が滅亡後、朝鮮が建国される頃に高麗の遺臣72人のうち一部が高麗の首都である松都を離れ、現在のチョンソン郡南面白夷山を隠居地として移り住み、時運を悲観しながらも「忠臣は二君に仕えず」を堅守した。七人の賢人が静かに暮らした地として居七賢と名づけられ、後に彼らの忠義を称えるための居七賢公園が造成された。一般的にチョンソンアリランの起源は、彼らの心情を漢詩にし、詠ったのが始めとされているが、文献的な根拠は確実ではないとのことである。

(注3) チョンソンアリラン研究所はチンヨンソン所長が1991年に設立し、チョンソンアリランと韓民族のアリランを研究している。また、口承されているアリランを記録し、体系的に研究している。チョンソンアリラン学校は、チョンソンアリランの伝承保全と教育のためにチョンソンアリラン研究所が1993年から運営している学校。

お知らせ

◎ 実施要綱にも記してありますが、参加申し込みの第1次締め切りは、7月17日（日）となります。このウリ77号発送が1週間ずれ込んだことから、1週間延ばしました。参加される方は、メールに添付されている参加申込書を送付して下さい。

◎ 第17回交流会に参加される方へ

航空券の領収書を旅行会社等からもらっておいて下さい。

7月17日（日）のモイムの時か交流会の会場でお渡し下さい。

よろしく願います。

◎ 授業研が立ち上がってから、授業研の通訳翻訳部長を長い間担当された松本さんからうれしいメールが届きました。以下にご紹介します。

皆さま お久しぶりです。

やっと夏の予定が確定して、交流会に参加できることになりました。

ただし日本での仕事を持ち込むことになるので、あまりお役に立てませんが。

往路は4日12：30成田発のOZ101です。

同じ便の方、ご一緒しましょう。

日本側にとっても韓国側にとっても非常にうれしく、またありがたいお知らせです。ぜひ、今回の交流会でもよろしく願います。

◎ 暑い日が日増しに多くなり、昨年のような暑さがまたやってきました。

今年は節電を心がけながらの夏となり、昨年のようにエアコンなどの電化製品をたくさん使うことも避けなければなりません。

交流会まで1カ月を切りました。

どうか皆さん、熱中症などには十分お気をつけ下さい。（編集：金）

@次回モイムのお知らせ@

日時：7月17日（日）

14：00～

場所：アジア文化センター

アクセス：

都営三田線千石駅より徒歩5分

※次回モイムが、第17回交流会の直前モイムとなります。交流会に参加される方はもちろん、参加されない方も万障お繰り合わせの上、ご参加下さいますようよろしく願います。

ウリ77号 2011年7月9日

日韓合同授業研究会

事務局連絡先（事務局長 藤田）

E-mail larrabee1991@yahoo.co.jp

会費納入先

郵便振替 00170-1-428530